

初級学習者を対象とする作文授業

—「文章表現A」授業報告—

A Class Report of “Composition A” for Novice Japanese Learners

吉 成 祐 子

要旨：

本稿は、岐阜大学留学生センター日本語研修コースにおける初級の学習者を対象とした作文授業「文章表現A」について報告するものである。2010年度前期から2013年度後期まで連続して担当してきた中で、主に行なってきた初級作文指導や活動を報告し、初級学習者に適した作文授業とはどのようなものであるかを考える。

1. はじめに

岐阜大学留学生センターでは、岐阜大学に在籍する研修生、大学院生、交換留学生を対象とした日本語授業（日本語研修コース）を提供している。日本語能力レベルによって授業時間の設定は異なるが、集中的に日本語を学ぶ「集中コース」（1週間に8～14コマ）と、専門の研究で忙しい中でも日本語が学べるよう配慮し設定した「一般コース」（1週間に1～5コマを選択）がある。集中コースは初級、初中級、中級、中上級の4つ、一般コースは初級、初中級、中級の3つのレベル設定があり¹、学期初めに行われるプレイメントテストによってクラスが分けられる。

本稿が対象とする初級学習者の作文授業は集中コースの初級レベルである「集中Aクラス」の一授業であり、例年7～10名の受講者を有する。このクラスには初めて日本語を勉強する者もいれば、独学あるいは出身大学等で基礎的な文法を勉強したことがある者もあり、同じクラスの初級学習者とはいえ日本語学習経験は様々である場合が多い。集中Aクラスでは1学期間（週14コマ×15週間）という短い間で、文字、語彙、文法、さらに会話やパソコン演習等、集中的に多くのことを学ばなければならない。その中の一科目として作文授業がある。

初級学習者の日本語授業で作文教育を行なうことは日本語を書き慣れさせることができるだけでなく、既習文型や語法等の定着を図るために有用であることが指摘されている（姫野1981）。しかし現状として、大学や大学院で学ぶ留学生には日本語力が十分ではなくても日本語でレポートや論文を書くことが要求される場合も多い。このギャップを埋めるための授業実践も報告されているが（藤村他1995）、習ったばかりの日本語を駆使して作文を書くことは、初級の学習者にとって難しい作業であるにちがいない。初級クラスの一授業として週1コマで設定された作文授業で何ができるだろうか。

本稿では、集中Aクラスの授業の一環として行われる作文授業「文章表現A」について、その位置づけと実際に行なってきた授業内容を報告し、初級学習者にとってよりよい作文授業とはどのようなものかについて考えてみたい。

2. 初級作文授業「文章表現A」での授業実践

2.1 「文章表現A」クラスの特徴

文章表現Aは初級学習者を対象とした作文授業と位置づけて1学期間授業が行われるが、実際には作文活動だけを行なうわけではない。初級学習者の総合的な日本語力を向上させるよう計画されている集中Aクラスでは、『みんなの日本語初級Ⅰ』『みんなの日本語初級Ⅱ』（1課～50課）をメインテキストとして初級文型を学ぶ「総合A」の授業を週11コマ（1コマ90分）と、初級会話を別の教科書で学ぶ「口頭表現A」、パソコンを用いて日本語入力や発表スライド作成等を行なう「パソコン演習」、作文授業である「文章表現A」の技能科目が1コマずつあり、計14コマで集中的に初級日本語を学ぶ。

本稿が対象とする文章表現Aの授業は週1コマ×15週間の15コマがあてられているが、最初の1、2週目は文字学習（ひらがな・カタカナ）に費やされることになり、実質、13コマほどしか作文授業にあてられない。また、1コマの時間も90分すべてが作文活動を行なえるわけではない。学期開始4週目頃から、毎時間授業始めに漢字クイズ（宿題となっている漢字の読み書きについて20問程度の確認問題）を実施することになっている（10分程度）。つまり、文章表現Aで作文活動に費やせる時間は1コマ80分程度であり、時には集中Aクラスのコース全体の学習進度に合わせ、総合Aで行なった文法テストのフィードバックや語彙クイズ等を文章表現Aの時間に実施することもある。このように、15週の作文授業といっても十分な時間がとれているとは言えないのが現状である。

上記のような時間的な制約がある中で、文章表現Aでは学期末に行われるプレゼンテーション発表会のスピーチ原稿を作成することを最終的な目標に設定している。このため、「一つのテーマについてある程度の長さで、まとまった内容を、他者にもわかるような作文が書けるようになること」が文章表現Aの授業目的となる。

2.2 授業を計画するにあたって

授業の計画を立てるにあたり参考としたのは、前担当者からの引き継ぎ資料である。前担当者が作成したプリント類は本授業で使用するハンドアウトの基となり、前担当者の授業報告は時間的な授業計画を立てるのに役立った。また、作文授業に関する出版物も参照した。初級学習者に対する作文指導の教科書は少ないが、『みんなの日本語』に準拠した作文ワークブックである『みんなの日本語初級 やさしい作文』は初級学習者でもまとまりのある文章が書けるようになるための工夫がされている。フローチャート及びモデル文によって全体的な作文の構成パターンをまず学習者に理解させてから、構成に沿った作文を書いていくワークブックとなっている。モデル文を提示すること、フローチャートで全体の構成を示す方法は本授業でも取り入れてハンドアウトを作成した。

『みんなの日本語』をメインテキストとして学習している集中Aクラスの授業進度に沿った活用ができる『みんなの日本語 書いて覚える文型練習帳』の作文課題も授業に取り入れた。例えば、「～から～まで」を使用して過去の行動を書く（4課）、「～たい」を用いて休みの日にしたいことを書く（13課）等、文法項目の復習も兼ねて短い文章を書く練習として利用できた。また、テーマに沿ってまとまった文章を書く段階では最終的にスピーチ原稿を作成することも考え、『初級からの日本語スピーチ』のスピーチ原稿の段落構成の提示やテーマも参照した。

2.3 授業内容

これまで2010年度前期から2013年度後期までの計8回、文章表現Aを担当してきた。受講者数（5～10名）やレベル差（ゼロ初級～初級文法学習済み）、受講者の興味、総合Aの授業進度等の違いから、毎回同じ授業内容を実施することはなかったが、段階的な授業目標の設定や活動内容、時間的なスケジュールは定着してきている。

先に述べたように、文章表現Aの時間には作文学習以外の様々な活動が行われるため、時間的な制限があった。また本授業の目標は、正しい日本語でまとまった文章（段落内の構成、文章全体の構成にも配慮しているもの）が書けるようになることであり、最終的には、発表ツール（パワーポイント）を使用しながらスピーチをするための原稿を作成することである（2000～2500字程度）。ゼロ初級も含めた初級学習者が短期間でその目標が達成できるよう段階目標を設定して授業を実施してきた。段階毎の授業目標やねらい、実際の活動例の概要を表1にまとめ、以下で詳述していく。

表1. 「文章表現A」における段階的な達成目標等の概要

段階	目標	活動	ねらい
1	日本語で文章を書くことに慣れる	文字学習 すごろく作文 日記	・正しく読みやすい文字で作文を書く ・学習した語彙や文法を用いて一文を作成する ・できるだけ長い文章を書く
2	作文の型や構成を学ぶ	自己紹介文 説明文（私の部屋、週末等）	・作文で使用される表現や構成パターンを学ぶ ・段落のある文章で内容を説明する
3	スライドと連動した文章を書く	紹介文（国の料理、国の行事等）	・わかりやすく説明し、紹介する文を書く ・スピーチ原稿の書き方を学ぶ
4	わかりやすいスピーチ発表を行なう	原稿作成 ピア活動 発表練習	・スピーチとしてわかりやすい文章を書く ・他者の意見を参考に、よりよい作文を目指す ・プレゼンテーション技術を学ぶ

2.3.1 段階1：日本語で文章を書くことに慣れる

初級学習者の作文活動において重要なのは、学習し始めたばかりの日本語を使って文章を書くことに慣れることではないだろうか。集中Aクラスのスケジュールの都合上、まず、作文授業では「文字学習」を行なうが、文字を正しく書く必要性を伝えるいい機会になっている。文章表現Aでは作文を手書き²、その作文をクラス内で互いに読み合う活動も行なう。そのためにも正しく、そして読む人にわかりやすいきれいな字で書くという目的を伝えることができる。

次に、学習した語彙や文法を使って、意味ある一文を作成する練習を行なう。既習語彙や文法の確認練習とも言えるが、学習した語彙や文法を身につけていればいるほど文章が書けることを実感してもらうことも重要である。そのために授業では必ず『みんなの日本語初級I 導入・練習イラスト集』25番のすごろくを使った「すごろく作文」を実施している。スタートからゴールまでのマスには7課までに学んだ約50の語彙がランダムに記されており、コマを進めた先の語を

使って一文を作成するという課題を行なう。例えば「買います」というマスに止まった場合、まず口頭で作成した文（例：私はリンゴを買いました）を発表し、用紙にその文を書く。口頭でまず作成した文を発表するのは、グループ内で正しい文であるかどうかを確認するため、またさらに長い文（例：私は「昨日」「スーパーで」リンゴを「3つ」買いました）が作れるようにお互いに指摘し合えるようにするためである。この活動は時制や助詞の間違いを確認し合ったり、困っている人にヒントを出したりする等のピア活動（協同学習）になっている。すごろくというゲーム性もあり、楽しみながら日本語で文を作ることができる活動であり、15～20文ほどを書けたという達成感を感じるようだ。学習者にとっても教員にとっても最初の7課までの語彙や文法をどのくらい覚えられているのかを確認することもできる。すごろく作文のようなイベント的な活動はその後行わないが、既習文法や語彙を用いて一文を作成する練習は後半の段階でも実施してきた。文法の定着確認とともに、書く作業の良いウォーミングアップになるからである。

さらに日本語で書くことに慣れるため、宿題として「日記」を書く課題を何度か出すことにしている。月日や曜日、天気、語彙を確認することもでき、また枠内にたくさんの情報を書く練習にもなる。授業の進度によって普通体で書くよう求めることもある。受講者が書いたものは必ず添削し、返却する際にはクラス全体でフィードバックも行う。最初はできるだけたくさん日本語で書くこと、そして語彙や文法を間違えないことを目標としているが、徐々に内容についても指摘するようしている。例えば、出来事を羅列するだけでなく、どのような気持ちだったのかを加えたり、一つの出来事について詳しく書くよう助言したりする。まとまりのある文章の作成を徐々に目指していく。

2.3.2 段階2：作文の型（パターン）や構成を学ぶ

日本語で文を書くことに慣れた後、作文でよく使用する表現や構成のパターンを学び、まとまった文章を書く練習を行なう。つまり、一文を書くことから、いくつかの文で伝えたい内容を書く手段を学ぶ段階である。

この段階では「自己紹介文」の作成を必ず行なうことにしている。自己紹介の際に必要な内容（名前、専門、出身地、趣味等）はほぼ決まっているために書きやすく、大学生活に関わる必須語彙も学ぶことができるからだ。所属する学部や専門分野の日本語名を知らないことも初級学習者では多く、個別に必要な語を学ぶことができる。授業活動としては、まず自己紹介で必要な項目をクラスで確認し、紹介する際の言い回しなどを導入する。作文の構成として、「はじめのあいさつ」→「自分の紹介」→「終わりのあいさつ」を提示し、A4版1枚程度のレポート用紙に自由に書いていく。

この活動ではいくつかの決まりごとを設けている。一つは制限時間を決めて作文を書くことである。どうしても書けなかった場合は宿題とするが、時間内に書けるようになることも重要である。また、日本語でどのように表現するのかわからない場合は辞書を使わずに、教員に質問することになっている。辞書を引くことを否定しているのではなく、この段階では日本語でやりとりすることも重要な学習活動であると考えからだ。学習した語彙や文法をなるべく用いて文章を作成するために、教科書や各自のノートを見ることは奨励している。

授業内に書き上げた自己紹介文は教員が添削し、次の授業で返却する。添削では文法の間違い等の箇所を示すだけで訂正はしない。自分で訂正する作業も学習者にとっては必要なことだと考

えるからだ。ここで訂正を求めるのは、日本語として意味がわかるかどうかのレベルにとどめている。内容について言葉が足りないところは授業内でのピア活動で見出せる指導を目指している。ペアあるいはグループになり、発表者は自らの作文を読み、聞き手はその作文内容について質問をする活動を行なう。例えば出身地について「あなたの町はどんな町ですか」という質問や、旅行が趣味だという発表に対して「どこへ行ったことがありますか」等の質問がでてくるが、その答えはまさに、作文内容をより豊かなものにする指摘となっている。その点をクラス全体で説明し、作文活動における協同学習を定着させることを心がけている。クラスメートからの質問やコメントを反映して自己紹介文を書き足す、あるいは書き直す作業も行なう。また時間があれば自分の家族の紹介や、日本人チューターにインタビューする課題を与え、その人を紹介する他己紹介文を書く宿題も実施している。

この段階では様々なテーマで作文を書きながら、「文章を書く際に気をつけるべき点」を指導していく。例えば、「私」（主語）を省略することや、同じ言葉を何度も繰り返さない言い換えること（「そこで」、「ここで」の使用等）、複文を用いること（例：父は57歳で、会社員です。）、接続詞を有効に使って文をつないでいくこと等を学ぶ。様々なテーマの作文を毎時間一つは書くようにしており、自分自身の出来事や物事を伝えるという、取り組みやすいテーマ（「私の週末」、「将来の夢」、「私の部屋」等）を選んでいる。授業の進め方としては、まず、作文に必要な型や構成を学ぶためにモデル文を先に提示したり、型に慣れるための練習問題等を行ない、その後、各自の作文に取りかかる。前述の自己紹介文と同様に、授業内で書き上げて提出し、次の授業で教員の添削をもとに訂正し、発表するというパターンを時間の許す限り繰り返した。発表は口頭で読むこともあれば、お互いの作文を交換して読み、コメントを書くという活動も行なった。このような活動により、作文は誰かに読んでもらうものであるという認識を持ち、それを意識することで丁寧に字を書く、わかりやすい文章を心がけるといった作文を書く際の姿勢を身につけてほしいという意図があった。もちろん、読み手からのフィードバックは作文をより良くするためのアドバイスにもなっていた。

また「作文の構成」として、「序論 Introduction」→「本論 Body」→「結論 Conclusion」→「結語 Ending」という流れを常に意識するよう伝え、本論はトピックによっていくつかの段落に分かれること、結論やエンディングでは自分の気持ちや意見を述べること等、典型的なパターンを提示した。もちろんこれに沿わない作文テーマもあると思うが、初級学習者の作文授業としては、まず型を知ることが大切であり、内容が独自のものであればよいと考えたためである。このような作文の構成はどの言語でも同じようなパターンであることが多く、構成を意識して作文を書く必要性は学習者もすぐに理解はする。しかし実際に日本語で書いてみると忘れることもあり、構成を意識させることに注意を払う必要があった。

2.3.3 段階3：スライドと連動した文章（スピーチ原稿）を書く

テーマに沿ってまとまった文章が書けるようになったら、段落の流れを意識した少し長めの文章が書けることを目標とした活動を行なう。最終発表に向けて、聞く人にわかりやすい説明ができることも重要な点であるため、相手が良く知らない何かを紹介する文章を書く練習を行なう。例えば、それぞれの出身地で有名な料理や観光地、国の行事等を紹介する文（「紹介文」）を作成する。

最終発表会に向けての練習も兼ね、スライドの写真を見せながら発表する際原稿を書く。これはパソコン演習の授業と連動して行なわれる。例えば「国の料理」というテーマでは、まず紹介したい料理の一つを選び、その料理の写真を用意してパワーポイントを作成する。この作成作業や指導はパソコン演習の時間に行なわれる。数段落の文章でその料理を紹介することになるが、作文の構成として以下のように提示し、段落を意識した作文を書く。

「紹介する際の定型表現（例：今から私の国の料理〇〇を紹介します）」

→「料理の説明」「料理に関する思い出」等

→「発表を終える際の定型表現（例：以上です。ありがとうございました。）」

時々問題となるのは、料理の説明をインターネットで検索して難しい言葉で説明しようとしたり、漢字に頼ったりする学習者がいることである。それを防ぐためにも、簡単な料理の用語や味覚の語彙を導入したり、日本料理だとかのようなものにあたるのか等、わかりやすく伝える文章を求めたりしている。漢字の多用は漢字圏の学習者同士が読んでわかるだけのものであり、非漢字圏の読み手に対してきちんと内容を伝えることにはならないこと、また表記では必ずルビをつけることも常々注意するようにしている。

このような紹介文を作成する活動で重視しているのは、学習者が独自の視点で書く作文の重要性を知ってもらうことである。料理の場合、インターネットで検索すれば出てくるような、ただ料理を説明するだけの作文を望んでいるのではない。もちろん、日本語で料理の説明ができることも重要ではあるが、料理にまつわる各自の思い出も含めることにより、その人にしか書けない料理紹介の作文になることを実感してほしいと考えている。このような意図は必ず受講者に伝えるようにしている。

2.3.4 段階4：わかりやすいスピーチ発表を行なう

文章表現Aの最終目標であるプレゼンテーション発表会の原稿を書き、発表練習を行なうことが最終段階となっている。これまでの授業でも、自分で書いた作文を読むことを授業内の活動に含めてきたが、大勢の前でのスピーチ発表になるため、発音練習や発表の仕方等の指導も必要となる。学期末はプレゼンテーション発表会に向けて集中Aクラスの授業を調整し、読み練習は総合Aの時間で、スライド作成やスピーチ原稿を書いて訂正を繰り返す作業はパソコン演習の時間と連動して行なっている。

スピーチのテーマは、出身地にばらつきがある場合は各自の観光地や行事についての紹介をすることもあるが、例年「今までで一番〇〇こと（例：うれしかったこと、大変だったこと）」というタイトルで、各自が〇〇にあたるものを選び、自分の経験を話すというトピックを選んでいく。各自の経験を振り返るには時間も必要であるため、〇〇にあてはまるものにはどんなものがあるかをクラスで確認したあと、テーマ決定を宿題として、次の授業から書き始めることを予告する。プレゼンテーション発表会での原稿であること、パワーポイントを使って発表する原稿になることなども最初に説明しておく。また時間があれば、これまでの集中Aクラスの学生が発表したビデオを見せることもある。

各自のテーマで第一稿を書き、教員が文法の間違いや意味をなさないところ等の指摘をした添

削原稿を返却し、書き直してパソコン入力するという作業を2週にわたって行なう。次に、クラス全員で一人の作文を読み、内容確認や意見を述べ合うクラスピア活動を行なう。初級学習者でも理解できる内容であることが必須であるため、一人40分程度の時間をあて、該当者の作文を全員に配布し、まず内容を確認する。初級レベルの活動であるため教師が主導することにはなるが、学習者からも意味が不明なところを指摘するだけでなく、段落の分け方、述べる順番、付け足すべき内容についてなど、良い指摘がなされることも多い。その際指摘されたところを書き直し、ペアでのピア活動、さらに書き直し、そして教員からの添削などを繰り返し、原稿を完成させる³。

原稿の完成はパワーポイントのスライド作成と平行して行なわれるため、適宜、内容や段落順の変更など修正していく。その後、発表のために個別の読み練習をしたり、クラスメートの前で発表し、声の大きさやスライドとのタイミング、発表する際の姿勢等を指導したりする。発表会では質疑応答もあるため、その練習も行なう。このような練習・指導は「書く」という作文作業から離れた活動になってしまうが、自ら書いた作文を大勢の人に伝えるためのものであり、最終段階としてふさわしい活動ではないかと考えている。

3. 初級作文授業での指導について

2章でまとめたように、段階的に目標を定めて文章表現Aの授業を行ってきた。作文テーマや作文構成パターンの提示方法を変える、ピア活動を取り入れるか否かなど、学期によって実際に実施した活動は異なるが、これまでの実践を通して、初級作文授業を指導して行く上で重視してきたこと、これからも授業を行っていく上で改善すべきと思われることをまとめておく。

3.1 重視してきた点

この授業で重視してきたのは、作文を書きっぱなしにしないことである。文章を書き終えたら必ず読み直し、自分自身で間違いや不十分な点に気づいて修正することを何度も注意した。また教員からの添削をもとに学習者自身が修正することも重要な作業だと考えている。

書いた作文を他者に発表することも、書きっぱなしにしないための一つの活動である。文章表現Aでは特に最終目標を原稿作成にしているため、内容を正しく理解してもらうための作文を書く姿勢が重要であると考えからだ。他者への発表は授業内でのピア活動も含まれ、高い頻度で行ってきた活動である。受講者によってはクラスメートに読まれることや間違いを指摘されることを嫌う人もいたが、何度も活動を繰り返すうちに、間違いがないかよく見直すようになったり、他者からの指摘を参考にする姿勢を身につけていくようになったりしている。教師だけでなく、受講者同士で助け合うことは必要であり、日本語を学ぶ者同士だからこその視点で指摘することも、特に作文においては可能であろう。

また、本授業で重視した作文授業におけるピア活動は、学習者の作文を読む活動も含まれるが、たとえモデル文のようないわゆる正しい作文ではなくても、多くの作文を読むことは作文を書く上でも参考になるし、間違いや内容の指摘する作業も、客観的に自分の作文を見るためのきっかけにもなったのではないかと思う。

3.2 改善すべき点

この授業では、授業時間の短さもあり、十分に書く時間が確保できなかったことが大きな問題であった。特にまとまった文章を書く作業は、時間がかかることもあり、十分な練習ができたとは言えない。それにも関わらず最後のスピーチ原稿作成では量も多く、内容的にも充実したものが要求され、学習者にとっては難しい課題に取り組まなければならない状況になっているのではないかと思う。段落毎のまとめり、つながりを学ぶ段階に費やす時間や練習が不足しているため、まとまった文章を書く時間や課題を増やすなど、限られた時間の中でも授業進度を調整し、改善していきたい。

もう一つの大きな課題は、作文修正の際の指導方法である。文章表現Aでは自分で修正する能力を身につけることや、学習者同士の活動を基にした作文改訂作業に重きをおいている。しかし、受講者によってはクラスやペアでのピア活動で得られた指摘による修正だけでは不十分で、結局、授業外での教員からのマンツーマン指導で作文を書き直し、完成させることもある。授業内でピア活動に多くの時間を費やしているが、教員からの個別指導を行なう時間も含めた授業計画が必要ではないかとも思う。その効果の違いなど、今後の検討課題として考えていきたい。

4. おわりに

より良い作文とは何かを定義するのは難しいが、少なくとも初級学習者にとってのより良い作文は、正しい日本語で相手にわかりやすく内容を伝えられる文章を書くことだろう。そのために段階的な授業目標を立てて授業活動を行ってきた。しかしそれだけに終始すると、文法上の訂正や作文構成の提示等、技術面を重視した指導になってしまいがちになる。学習者には自分の考えや意見を伝えることができる作文の楽しさも知ってほしいと願っている。その二つが両立できるよう、よりよい授業の進め方を模索しながら、今後も初級作文の授業を考えていきたい。

注

- 1 一般コースは学生数やレベル差等の状況に合わせてクラス設定が変更されることがある。
- 2 パソコン演習授業での入力練習のために自らの作文を入力することもあるが、作文する際にはまず手書きする。またプレゼンテーション発表会のためのスピーチ原稿作成では入力が義務づけられているが、第一稿は必ず手書きで提出することになっている。
- 3 集中Aクラスのピア活動については野原・吉成（2013）に詳しく報告されている。

参考文献

- 飯島ひとみ・芝薫・高本佳代子・村上まさみ（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ 導入・練習イラスト集』スリーエーネットワーク
- 門脇薫・西馬薫（1999）『みんなの日本語初級 やさしい作文』スリーエーネットワーク
- 国際交流基金関西国際センター（2005）『初級からの日本語スピーチ—国・文化・社会についてまとまった話をするために』凡人社
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅰ 本冊』スリーエーネットワーク
- スリーエーネットワーク編著（1998）『みんなの日本語初級Ⅱ 本冊』スリーエーネットワーク

姫野昌子 (1981) 「文章表現の指導」『日本語教育43』 pp.1-16

平井悦子・三輪さち子 (2000) 『みんなの日本語初級Ⅰ 書いて覚える文型練習帳』スリーエーネットワーク

平井悦子・三輪さち子 (2000) 『みんなの日本語初級Ⅱ 書いて覚える文型練習帳』スリーエーネットワーク

藤村知子・金子比呂子・伊丹智恵 (1995) 「橋渡しの中級作文教育—初級作文からレポート・論文へ—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集21』 pp.97-126

野原美和子・吉成祐子 (2013) 「初級日本語学習者によるピア・レスポンスの実態と効果—読み手が学習者と教師の場合の比較—」『岐阜大学留学生センター紀要2012』 pp.39-55

